

「アジア太平洋戦争*についての社会的な見方・考え方を
身に付けるための小学校社会科実践」
～地方史と全国史の連動 旧相馬村「舟打鉱山」の教材化を通して～

“Elementary Social Studies Practices for Developing Social Perspectives
and Way of Thinking about the Asia-Pacific War”
– Connecting Local and National History Through Teaching Materials
on the Former Soma Village’s “Funauchi Mine” –

佐藤 一幸**
Kazuyuki SATO

要旨

本実践では、教科書に表れる全国の歴史と、そこには示されない地域の歴史を連動させることによって、児童が歴史認識を深め、社会的な見方・考え方を身に付けることをめざした。

児童は、地元の郷土史家が残した資料をもとに、かつてあった旧舟打^{ふなうち}鉱山と、全国の鉱山の鉱石産出の動きが関連していることに気付きながら、これが、戦時体制に影響されていることを理解する。戦争に関して教科書では、集団疎開、空襲被害や沖縄戦を中心に上げられ、児童の戦争へのイメージもそこから形成されることが多いが、ここに地元の鉱山の歴史を重ね合わせることによって、戦争が当時の地域社会に深く入りこんでいたことを知るとともに、自己の考えや学びを深めていくことにつながる。

キーワード：社会的な見方・考え方 アジア太平洋戦争 地方史 全国史

1. はじめに

旧舟打鉱山（以下、舟打鉱山）は、旧相馬村（現弘前市）の沢田集落から約4キロメートル東に存在していた金属鉱山である。記録では、幕末期から操業を始めるが、日本曹達^{ソウダ}金属鉱山（株）が、昭和9（1934）年に再開発に着手、同10年から本格的に稼働する。主な産出鉱物は、銅、亜鉛、鉛、である。銅は、日本曹達に経営が移行する前に産出を終えている。この舟打鉱山地区には、最盛期で約1200人もの人が住んでいたとされる。

閉山は、昭和37（1962）年で、授業で取り上げる舟打鉱山小学校（後の舟打小中学校）は、翌年8月31日に閉校となっている。

舟打鉱山と舟打鉱山小学校については、現地の遺構と豊富な資料が、児童に分かりやすい形で残っているので、学習材としてふさわしいものである。

本実践では、まず児童に鉱山のもつ特異性を示して、関心をもてるようにする。次に、児童は戦時中の舟打鉱山小学校の児童在籍数変化と、実際の鉱石産出量がほぼ比例する数値データを比較しながら相互の関係に気付く、そこから学びを広げてゆく。

児童が、歴史研究のおもしろさを感じながら、事象間の関連性に気付くことで、歴史認識を深め、社会に対するものの見方や考え方を身に付けてゆくことをねらうものである。

* 「アジア太平洋戦争」の対象期間について、筆者は少なくとも日中戦争以降と考え、また対中戦対米英戦を一連のものとする立場からこの文言を使用した。実際の学習と本稿記述にあたっては、教科書の内容にそって別個に扱っている。

** 弘前大学教育学部附属小学校 Hirosaki University Faculty of Education Elementary School

2. 研究の目的

教科書に示される全国史の内容を踏まえ、身近にある舟打鉱山や他鉱山のデータを比較検討することにより、歴史事象に対する社会的な見方・考え方を身に付けてゆくことをめざすとともに、児童の学びの深まりを見取りつつ、授業を検証・分析することで、よりよい歴史学習づくりにつなげること。

3. 研究と検証の方法

(1) 研究の方法

本研究について、次の2点を行う。

- ①現地調査、関係者への聞き取り、各種記録の分析を経て提示資料としてまとめ、授業を実施する。
- ②授業の進行に合わせて資料を提示し、舟打鉱山と他地域の金属鉱山生産量と戦争との関係を捉えながらその意味を考える。

(2) 検証の方法

歴史事象に対して、社会的な見方・考え方が働き、学びが深まったかどうかを検証する方法として、次の2点を行う。

- ①児童の学習感想の中に、事象に関連付けて考えた記述があり、構造的、関連的な見方をしながら、学びの深まりが表れているかを分析する。
- ②授業後のアンケートを実施し、数値データと記述から、①と同様の分析を行う。

4. 現地調査と資料調査

実践に向けての直近の現地調査を、2021年5月16日(日)、11月28日(日)の2度行った。5月の調査では、14年前に1度目の調査をした時の記憶をたどりながら、遺構全体の概要を改めてつかんだ。

案内をしてくださったのは、1994年発行の記録集で本実践の中心資料とした「舟打鉱山の興亡」(相馬村教育委員会編、以下「興亡」)編集調査員の一人、三上久光氏であった。

三上氏のお話からは、鉱石搬出用索道基地の位置など、「興亡」だけでは分からない事実など、多くの知見を得ることができた。

11月の調査は、授業場面を意識して写真撮影を中心に行った。その際、14年前に発見しておきながら、5月の調査では見つけられなかった「藍内坑口」を発見することができた。坑口は鉱山の象徴的な遺構であり、授業実施に際して外すことができないと考えた(現在、崩れた坑道から湧水があり、授業では動画として提示した。他の主要坑口は埋没している)。

2022年1月14日(金)は、弘前市立相馬小学校で資料調査を行った。松木弘志校長の御協力のもと、貴重な資料を見せていただくことができた。

筆者は以前、同校に勤務しており、舟打鉱山に関する資料としては、「相馬郷土史」等の存在を知っていたが、他の資料の存在は認知していなかった。そのような資料の確認も含めて訪問した。同時に、この鉱山を知るきっかけとなった「舟打小中学校」と書かれた木琴の存在も確かめたかった。

残念ながら、資料としたかった木琴は既に廃棄されていたが、校長室には「日曹鉱業株式会社」や「日本曹達舟打鉱業所」と書かれた罫紙を使い作成された「舟打鉱山小学校沿革史」「舟打中学校沿革史」「舟打青年学校沿革史」「職員履歴書綴」などがあることを確認した(「中津軽郡相馬村立舟打中学校」の罫紙も一部使われている)。

この沿革史によれば、「舟打鉱山小学校」は、昭和12(1937)年12月に「相馬第二尋常小学校舟打鉱山分教場」として、「長屋の一室」からスタートし、翌年2月に新校舎が建設されていることが分かる。本資料には開校時からの児童数も記録されており、この数値を使って「児童在籍数の変化」(資料1)を作成した。

なお、次の4枚の写真は現地調査における現状を記録したものの一部で、授業にも使用した（筆者撮影）。



（写真1）遺構現状：変電所跡の様子。付近には、タールを塗った木製の電柱基部も残る



（写真2）変電所跡に残る^{いし}礎子（左の手袋は大きさ比較のためにおいたもの）



（写真3）遺構現状：生活用水と選鉱用水をためた貯水槽基部（かつては、この上に覆屋があった）



（写真4）遺構現状：「藍内坑」坑口

5. 授業の実際

(1) 小単元での位置付け

授業は、「小学社会 6 年」（日本文教出版）小単元「11 アジア・太平洋に広がる戦争」（7 時間）の発展「つがりあんコーナー〜 その時、津軽は！〜」として設定した（3 時間程度）。なお、「つがりあんコーナー」は、地元に関する題材を扱う時に使用する学習時間名である。

(2) 目標

- ①身近な地域に鉱山があったことと、鉱山の役割と鉱山での暮らしぶりを知る。
- ②鉱山の鉱石採掘が、戦争と結びついていたことを、資料の事実から知るとともに、そのことが全国的な動きであることに気付き、そこから自分の考えを表現する。
- ③地方の動きは、全国の動きと連動していることを理解し、こうした事実をもとにした新たな見方を、今後の学習に生かそうとする。

(3) 展開と実際

① 1 時間目：「舟打鉱山を知る」

「興亡」をもとに、2 時間程度の学習で使用する約 50 枚のスライドを作成した。鉱山については、ほとんどの児童が初めて知るので、まず一般的な鉱山内部の様子や鉱物などを確認した。また、「興亡」に掲載されている写真を一般的鉱山資料として用い、生活の様子や坑内で働く人々の様子を中心に紹介した。

その後、「弘前にも、鉱山はあったのだろうか」という問いかけをした。それをきっかけに、児童は GoogleEarth や地図を使って舟打鉱山の位置を確かめ、舟打鉱山や小学校のくらし、鉱山の仕事について調べ始めた（この時、時間の関係で、鉱山町のイメージまでは、つかませることができなかった）。

また、亜鉛や鉛が、何の原料になるかは各自で調べ、戦争で使う武器や生活に関する物資になることを全体で確認した。

スライドの中には、「舟打鉱山では、□□の人々も働いていました」の「□□」を考えさせる場面も作った。前単元での既習事項ではあったが、舟打鉱山とは結びつかなかったようで、「韓国」や「朝鮮」という意見は、すぐには出てこなかった。

ところで、秋田県鹿角市にある尾去沢鉱山跡の観光施設「マインランド尾去沢」は、近年は規模も縮小され（現在は「史跡尾去沢鉱山」）、行ったことのある児童は、わずかであった。「身近度」という言葉があるならば、子どもたちにとっては、鉱山は「身近度」がかなり低いことが感じられた。

また、舟打鉱山でも過去に鉱毒問題があり、鉱山と鉱毒は切り離せないことを押さえた。前々単元の内容にあった「足尾銅山鉱毒事件」に関しては、十分に時間がとれなかったので、今回は鉱山問題について考える機会にもなった。

② 2 時間目：「舟打鉱山と戦争について考える」

下記の資料 1 から、「舟打鉱山小学校児童数は、なぜ急に増えたのか」という問いを設定した。答えは多い順に「ア戦争被害から逃げてきたから（集団疎開）→イ鉱山の収入が大きいから→ウ子どもを働かせたから→エ戦争と関係している」という結果だった。

アの意見の割合は、5 割ほどであった。ほかに、「収入がいいので外国人労働者が来た」という意見もあった。

集団疎開など、これまでの学習が生きているとも言えるが、鉱山町の特性を伝えながら話し合いを進める中で、「寺など、疎開するような場所がない」「子どもには働けない環境」ということが分かり、更に話し合いを重ねた。その中で児童は、「子どもだけが增える訳ではなく、大人が増えたのだ」ということに、次第に気付いていった。

次に、「ではその大人たちは、何をしに来たのか」という問いには、様々な意見が出たが「鉱山の採掘」ではないか、という考えに落ち着いていった。

その考えを裏付ける根拠として、児童が求めた数値データが「鉱石の産出量」に関係のある資料 2 である。採掘量が増えたことが分かれば、ある程度の仮説検証ができるということになる。

資料 1

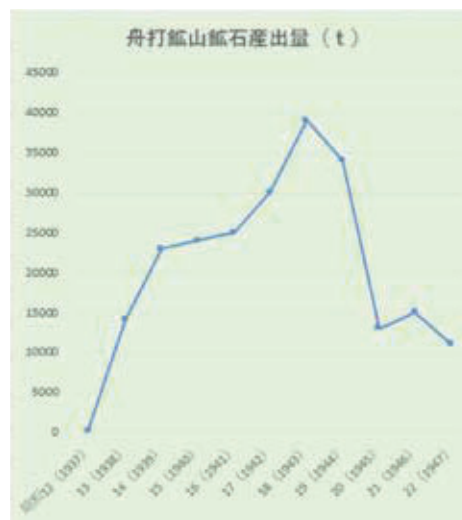
舟打鉾山小学校 児童在籍数		
年度	児童数（人）	できごと
昭和12（1937）	21	開校
13（1938）	22	新校舎建部
14（1939）	60	
15（1940）	90	
16（1941）	92	
17（1942）	105	
18（1943）	137	
19（1944）	142	
20（1945）	145	
21（1946）	107	
22（1947）	115	



（相馬村教育委員会編「舟打鉾山の興亡」1994年、63ページを参考に筆者作成）

資料 2

舟打鉾山 鉾石産出量（概数）		
年度	産出量（t）	できごと
10	70	
11	100	
昭和12（1937）	200	
13（1938）	14000	
14（1939）	23000	
15（1940）	24000	
16（1941）	25000	
17（1942）	30000	
18（1943）	39000	
19（1944）	34000	
20（1945）	13000	
21（1946）	15000	
22（1947）	11000	



（相馬村教育委員会編「舟打鉾山の興亡」1994年、163ページを参考に筆者作成）

幸い、「興亡」には、児童数と同時期の鉾石産出量を示す折れ線グラフがあったので、概数ではあるが、これから筆者が数値を読み取って、再度グラフ化した（数値データのみを児童に提示して、Microsoft Excel等を使ってグラフ化し、「自分の資料」とさせたかったが、時間の関係で筆者が作成したものである。児童へは紙媒体配布とタブレットの画像送信機能で提供した）。

資料提供をする前に、「児童在籍数グラフと比べて、どのような変化をするのか」を考え、それから一斉に比較した。すると、増減が年度と一致しながら比例しており、どよめきの声があがった。

その後、「この増減の比例からどのようなことが言えるのか」を話し合った。結果、「舟打鉾山小学校の児童は、鉾山に働きに来た人の子どもたちだった」という結論に至った。

この2回の大増産と1回の大減産が日中戦争とアジア太平洋戦争の開始・敗戦と、時期が一致していることに多くの児童が気づき、「増産と減産が、戦争と関係しているのでは」という考えが導き出されてきた。

ここで「本当にそうなのだろうか。舟打だけの偶然の一致なのでは」と、問い返しをした。「いったい何が分かれば、みんなの言っていることが確かめられるのだろう」と問うと、「全国の動きが分かればいい」という意見が出たので、児童は、検索の言葉を考え合いながらタブレットで調べはじめた。

やはり、まとまった資料が中々見つからないということだったので、同時期他鉱山の資料を提案した。児童からは「ぜひ欲しい!」という要求が出たので、舟打と同じようにグラフの形状を想像し、類似したものになるかどうかを予想しながら、一斉に比較した（岐阜県旧神岡鉱山の鉱石産出量の変化グラフ、資料3を参照）。

資料3

神岡鉱山 鉱石産出量（概数）		
年度	産出量（t）	できごと
10	244000	
11	302000	
昭和12（1937）	366000	
13（1938）	477000	
14（1939）	490000	
15（1940）	808000	
16（1941）	745000	
17（1942）	781000	
18（1943）	919000	
19（1944）	949000	
20（1945）	354000	
21（1946）	305000	
22（1947）	305000	



（中島信久「我が国の亜鉛鉱山・精錬所の変遷と海外亜鉛資源確保の取り組み」119ページを参考に筆者作成）

児童からは、「あっ、おんなじだ!」という驚嘆の声が上がった。

もちろん、どこの鉱山でも同じ状況とは言い切れないことを確認した上で、一定の証明がなされたことに、児童は満足の様子であった。

ちなみに三井金属鉱業（株）経営の神岡鉱山は、舟打鉱山とは桁違いの産出量を誇る当時、東洋最大の亜鉛産出鉱山（一時期全国9割のシェア）で、戦後の「イタイタイ病」の原因鉱毒、カドミウムを流出させていた（閉山後の現在は、鉱山跡に同社保有の実験施設「スーパーカミオカンデ」が設置されている。この事実にもふれておいた）。

学級での違いはあるが、児童から出された授業のまとめとしては、概ね「（児童数と）鉱石の産出量は、日中戦争から続くアジア太平洋戦争と関係している。このことは、他の鉱山も同じなので、全国的にも同じだと言える」という内容であった。

このあと、学習感想「社会科の宝」をMicrosoft Teamsに投稿し、共有と交流を図った。

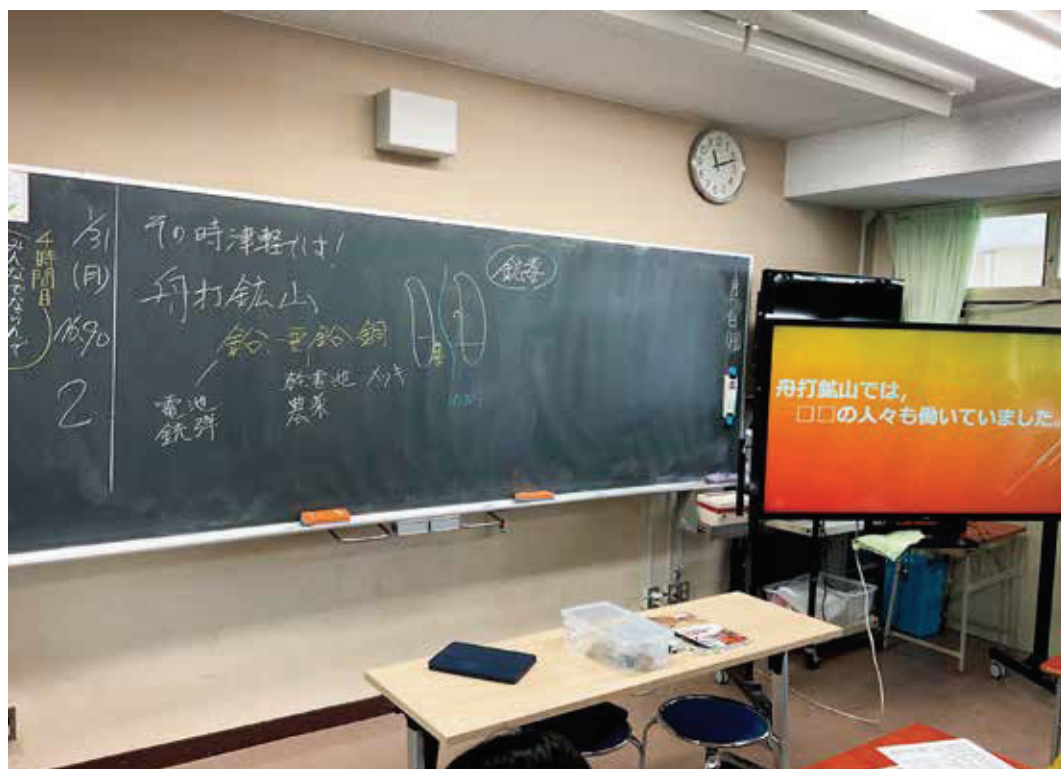
資料4は、板書と授業の様子である。

資料 4

1 時間目 A 学級板書



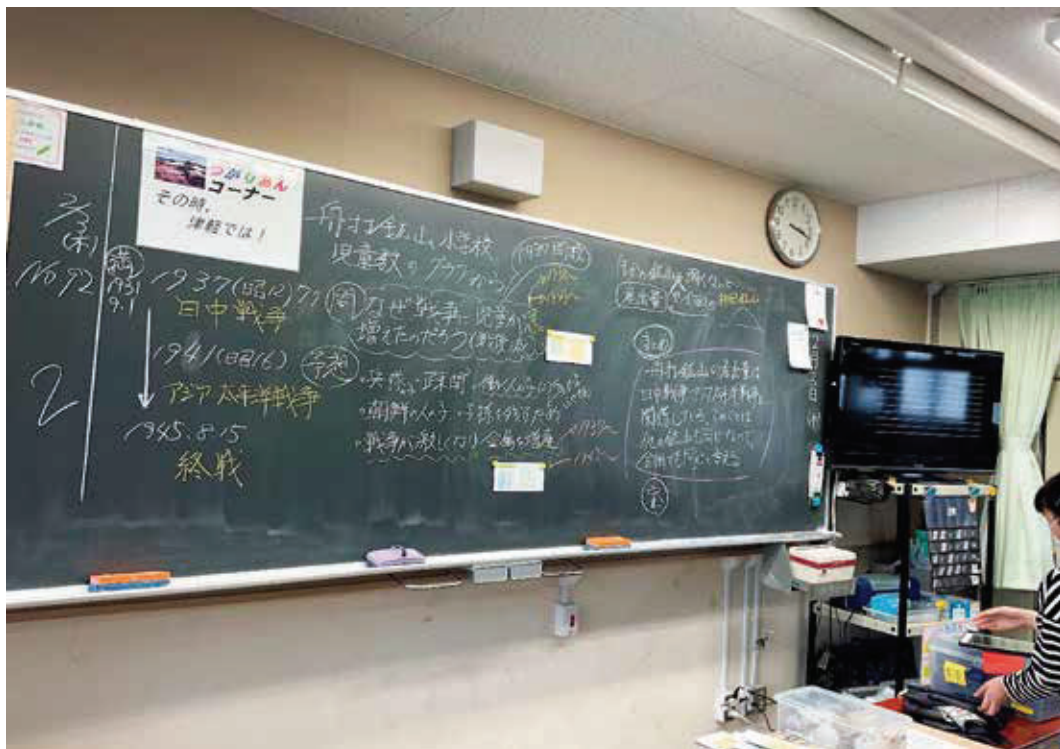
1 時間目 B 学級板書



2 時間目 A 学級板書



2 時間目 B 学級板書



6. 分析と考察

(1) 学習感想から

授業では、思考の前提として、まず全国には多くの鉱山があり、県内や弘前地域にも存在した、という事実を確認したが、このことについては、しっかりと認識できたようである。舟打鉱山と弘前との関連についての記述を含めて以下に提示したが、多くの児童が戦争との関連に言及している。学習感想に記述がなかったという児童はなく、下の図1のような感想は、ほぼ全員が記していた。

- 身近な所で鉱山があったことも驚いたし、戦争は負けたけど全国いろんな場所でこのような変化があって、いろんな人のおかげで戦争は成り立っていたと感じた。
- 弘前にも鉱山があつて、鉱山と戦争が関わっていることも知れてよかったです。
- 身近なところに鉱山があることに驚きました。戦争と鉱山が関わっていることも面白かったです。
- 青森の鉱山の産出量にも戦争の影響が出ていて驚いた。

図1 弘前と舟打鉱山に着目した児童の記述（おもに目標①に関して）

図2で示すように3つのグラフがほぼ比例・類似していることは、児童にとってインパクトがあったようだ。筆者自身も驚いたほどである。この時点では、神岡鉱山のデータのみで、全国必ずとは言いきれないことは確認したが、舟打と同じ亜鉛鉱山であり、当時東洋最大の産出量を誇った「ヤマ」のデータは貴重であった。この一致点だけでなく、戦争や生活と結びつけて考えている児童が予想以上に多く、思考の深まりを感じることができた。

- リンクしていて、びっくりした。
- グラフと戦争がリンクしていて面白かった。
- 鉱山と戦争中の人の暮らしや行動が鉱山とリンクしていてびっくりした。
- 戦争の出来事によってグラフがすごく変わっていて驚いた。
- 鉱石をたくさん産出しているところは親の数が多いと思った。
- 親の増減は生産量の増減にほぼ比例していて、これは日中戦争とアジア太平洋戦争に関係しているとは思いませんでした。
- 私は、給料が高くて戦争から逃げられるから、山奥の鉱山に働きに来る人が多いのかと思ったけど、歴史やいろんなことがつながっていることがわかったし、それほど戦争が激しく、物資が必要だったのかなと思った。
- 舟打鉱山の鉱石の産出量が上がっていた頃、全国の鉱山でも同じデータだったことに驚いた。戦争はその時代に生きている人たちの生活にとことん関わっていると思った。

図2 戦争や全国の動きと関連させた記述（おもに目標②に関して）

図3のように、戦争や生活以外にも、他の事象と関連させて新しい疑問をもったり、見方を広げて考えたりしていると思われる記述は、学級によってばらつきがあるが、全体の3割ほどあった。

- 一気に増える→一旦収まる→また増える→一気に下がるの流れが、どのグラフにも共通していて面白かった。
国家総動員法によって、国民が戦争に参加させられたのかな、と思った。
- 条約改正もそうだったけれど、戦争で暮らし？が変わる人達が多いんだなって思いました。弘前市の鉱山も戦争と関わっているのが分かりました。
- 小学校の生徒の人数→親の数→働く人の数→鉱石産出量→日中戦争とアジア太平洋戦争から終戦のようにつながったのはびっくりした。他の問題や疑問もこのようにつながっているのかもしれない。
- これほどリンクするということは全国でも同じだと思った。
- 他にもリンクしていることや異なることがあると思った。他にも戦争にリンクしているグラフがあるんじゃないかと思った。
- 児童数と鉱山の鉱石産出量がここまでリンクしていて、びっくりしました。他の戦争の時はどうなっているのかになりました。
- 日中戦争とアジア太平洋戦争の時はグラフどおりだけれど、日清戦争や日露戦争の時はどうなんだろうかと気になった。
- 舟打鉱山の児童数が増えたことを問題にするだけで、こんなにも議論が盛り上がるので、歴史は面白いと思いました。鉱山の産出量が全国で同じなのかを調べたいです。
- 全国で産出量が増えたのなら世界ではどうだったのか気になりました。
- 戦争が始まったことにより、児童が増えたことはよくわかったけれど、終戦後の舟打の人の行方が気になった。また、グラフを探している時に、1970年代にも産出量が増えている鉱山もあったので気になりました。
- 予想してそれを裏付ける証拠を探すのが、ふつうの社会科のイメージと違ってとても楽しかったです。
- ある一部の地域だけ影響を受けているのではなく、全国的に同じくらいの影響を受けていたことに納得しました。

図3 全国の動きと関連、さらに見方や考え方を広げる記述（おもに目標③に関して）

ところで、授業構想段階では、戦争と鉱石産出の関係を考えるだけであれば、「児童在籍数の変化」（資料1）は無くてもいいとも考えた。しかし、それではあっさり終わってしまうことにもなりかねない。せっかくの貴重なデータを生かして深く考えることをうながしたいと思い、以下の2点をねらい実施した。

1点目は学校の児童在籍数を扱うことで、はじめから戦争と関連付けて考えている児童には、「ゆさぶり」となり、思考の裾野が広がることで他の児童が様々な意見を出せることである（実際、「たくさんの言葉が出て復習になった」という意見もあった）。

2点目は小学校を取り上げることで、児童はより身近な問題として捉えること、一見関連の無さそうな小さなことでも、実は大きなことにつながっていることに気付くことを期待し、資料1を使用したことである。

その結果、1点目については、全員が「同じスタート」から考えることができ、気付きかけていた児童に

としては、自分の考えを確かめることにつながった。また2点目については、いきなり難しそうな鉱山データではない、取りかかりやすさがあったようだ（課題については、改めて後述する）。

(2) アンケート結果から（調査児童65名）

①設問1「舟打鉱山など、地域の授業を行ったことについて、どう思いましたか」

「よかった」が90%（58名）,「少しよかった」が10%（7名）,「あまりよくなかった」「よくなかった」は0%（0人）であった。「よかった」の理由は、図4の通りである（代表的なものを抽出している）。

- 今まで気にしてなかったことや、舟打鉱山で取れる鉱石のことも知ることができたから。
- そういう、遺跡や○○の痕跡の大切さを学び、のちにそれらを守れるようになるかもしれない！
- 資料や地図などで、地域にある鉱山や戦争中と戦争後のことが比べやすかったから。
- 昔の鉱山は、どんな感じだったか知ることができたから。児童数なども、戦争に関わっていることも知れたから。
- 青森県内だから、社会科の中でも身近に感じられたし、今まで持っていた知識と重ね合わせられる授業だったから。
- この地域に鉱山があるとは思わなかったからです。気になったのでうちで調べるきっかけになりました。
- 自分の地域の歴史と勉強しているところの関わりがわかったから。
- 狭い地域だけでなく、他と比べることで違うことや同じところなど、今までの学習を生かして考えることができたから。
- 舟打鉱山では、朝鮮の人も働いていたということを知って、その時の歴史と結びつけることができたから。
- 舟打鉱山について学習して、教科書の学習では知ることのできない情報や、地方の生活などについて知ることができて、大きな出来事のあった後の影響について知ることができ、教科書の学習を深める元になった。
- 教科書に載ってなくても、地域のことについて知ることはいいと思うから。全部教えてもらうのではなく、資料を見て自分で予想したり、なんでこうなるのかを自分で考えたりするのがいいと思った。
- 今いる地域の昔の歴史を調べると、戦争に自分の地域はどのような援助、関わりをもっていたのかや、自分の地域はどのような役に立っていたのかを知ることができて、自分にとって、興味深い授業になりました。
- 戦争が、全国的にだけでなく、すべての地域に被害がおよんでいることが分かり、戦争をすることの恐ろしさが改めて分かったから。自分たちの住んでいる地域で、昔戦争が人々とどのように関わり合いながら生活していたかなど、知らなかったことを知り、より地域に興味を持って生活ができと思ったからです。
- 地域のことは教科書に載ってないし、わざわざ勉強しようと思ったことがなくて勉強する機会がなかったの
で、地域のことについて知れる楽しい授業でした。
- 津軽の歴史をまたひとつ知れたから。母も、祖母も、父も知らなかったから。

図4 設問1において「よかった」と回答した児童の記述（一部抜粋）

「少しよかった」の理由は、図5の通りである。「少しよかった」を選択した児童の記述を見ると、「よかった」の児童と比較して、記述の具体性がやや低い。学習の深まりが足りなかったという点で、課題としなくてはならない。

- 今まで分らなかったことが分かったから。
- 戦争中の鉱山の状況を知れたから。
- 身の周りの戦争に関わることが知れたから。

図5 設問1において「少しよかった」と回答した児童の記述（一部抜粋）

ところで、アンケートの記述から、児童は地域の歴史に興味関心があることが分かる。

しかし、「知りたいが、教科書に記載はなく、地域の歴史資料を目にする機会もない」ことが理由で、児童は「知ることができないだけ」ということである。

本実践では、「知ることによって本当に身近な歴史」となるのだということを感じる。

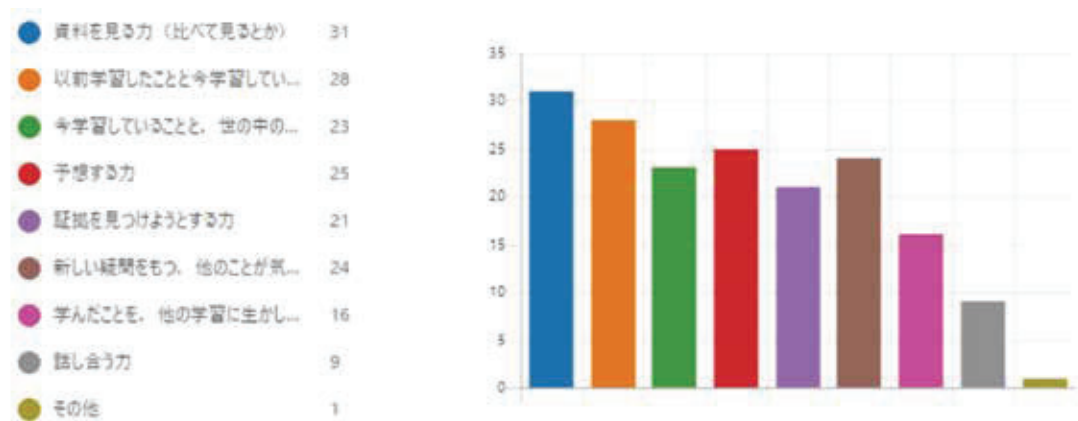
当たり前だが、「身近な地域の歴史」だから、はじめから「身近」という訳ではない。

児童は知ることによって「身近となった地域の歴史」を、改めて全国史と関連付けて考え、情意を動かしている。このことは、歴史認識が深まったことを示すと言えるのではないだろうか。

②設問2「この授業で自分の身に付いたなあ、と思うものを選んでください」（複数可）

図6のように選択項目として、期待した内容を羅列したが、児童の意識として、やはり資料のインパクトが強かったことが分かる。これと並んで、視野や考えを広げていく項目も選ばれている。

児童の「その他」の意見としては、「3番目に少し似ているけれど、今、世の中でおこっている事と結びつけて考える力」というものがあった。リアルタイムで起きていることと結びつける、この見方もとても大切なことである（例えば、ロシアのウクライナ侵攻など）。



【選択項目】

- ①資料を見る力（比べて見るとか）
- ②以前学習したことと今学習していることを結びつけて考える力
- ③今学習していることと、世の中の他のことに関係づけて考える力
- ④予想する力
- ⑤証拠を見つけようとする力
- ⑥新しい疑問をもつ、他のことが気になる
- ⑦学んだことを他の学習に生かしていこうとする
- ⑧話し合う力
- ⑨その他

図6 設問2の集計結果

7. 本実践の成果と課題

(1) 成果

- ①地域の歴史の一端を知り、その歴史が全国の歴史、とりわけ日中戦争、アジア太平洋戦争と関連していることに気づき、自分の考えや思いをもてたこと。このことから、新たな見方・考え方が、身に付いたと考えられること。
- ②時間軸と空間軸から事象を関連づけて考え、表現することができていたこと。
- ③自身の見方・考え方から生じた疑問や仮説が、資料や話し合いから明らかになるおもしろさを感じ、このことで次の学習への意欲につなげることができたと考えられること。
- ④自分たちの住む地域の歴史に興味をもち、認識を深めることができたこと（将来の歴史資源の保存や活用を期待できる）。

(2) 課題

学習感想、アンケート結果を分析すると、概ね期待した成果を得られたようではあるが、授業設計の粗さから生じる課題も多い。以下に5点を示す。

- ①最初の学習問題として、舟打鉾山小学校の児童在籍数の変化（資料1）を取り上げたが、思考の広がりが出た反面、時間もかかり、戦争との結びつきがぼやけてしまった感がある。前提となる理解が十分でない児童にとっては、特にそうであったと考えられる。前学習で、当時の状況、軍需物資と鉾物の関係など、もう少し丁寧に進めると、違った反応があっただろう。
- ②学びながら新しい問題に気付いてまた調べて考える、という過程を十分に身に付けていないことが、関連する記述等の少なさからうかがえた。社会科授業の中で、しっかりと意識付けしていかなければならない。また、みんなでつかんだ事実をもとに、主体的に話し合いを進めていく、という活動についても不十分であった。
- ③研究のテーマや目的の大きさの割には、それに見合った十分な成果を出していない。今回の結果内容をより満たそうとするならば、授業における鉾山、戦争に関する部分を厚くして、骨格のよりはっきりとしたものにする必要がある。
- ④児童が実際に鉾山跡に行ってみることができれば、それに越したことはない（しかし、道路状況、最近は大熊の出没など危険要素が多く困難である）。ぜひ、実際に見て欲しいが、授業ではそのリアルさを補えただろうか。また、鉾山操業時を知る人には、健在の方もおられるので、その方達にリモートインタビューなどができた。そうすれば、よりホンモノの学びが深まっただろう。
- ⑤全国の動きと更に結びつけるには、まだデータ不足であった。そのため、この実践の後、歴史単元のまとめとして、北海道東部、現釧路市音別町にあった、旧尺 別炭砦^{しゃくべつ}の情報を提供し補完した。舟打と同様に、鉾山小学校の児童在籍数傾向が類似し、石炭の産出量が、全国的な増産減産傾向と見事にリンクする数値データである（資料5）。

児童がこうしたデータを見つけるのは難しいが、学習時間を確保して、全体で集めたデータから総合的に考える、また教師提示の資料と比較分析させるなどの活動を、更に行っていくことが大切である。

資料 5

尺別鉱山小学校 児童在籍数		
年度	児童数(人)	できごと
昭和12 (1937)	290	
13 (1938)	410	
14 (1939)	540	
15 (1940)	550	
16 (1941)	610	
17 (1942)	710	
18 (1943)	720	
19 (1944)	730	
20 (1945)	540	
21 (1946)	590	
22 (1947)	580	



(嶋崎尚子・新藤慶・木村至聖・笠原良太・畑山直子「つながりの戦後史尺別炭鉱閉山とその後のドキュメント」青弓社、2020年、39ページを参考に筆者作成)

尺別炭鉱 石炭産出量(概数)		
年度	産出量(t)	できごと
10	90000	
11	130000	
昭和12 (1937)	210000	
13 (1938)	310000	
14 (1939)	340000	
15 (1940)	410000	
16 (1941)	430000	
17 (1942)	380000	
18 (1943)	390000	
19 (1944)	140000	
20 (1945)	0	
21 (1946)	10000	
22 (1947)	60000	



(同上書、92ページを参考に筆者作成)

8. おわりに

本報告を終えるにあたり、今後の実践の広がりや追試可能性のために以下の4点を記しておきたい。

(1) 研究手法の確認

「はじめに」でふれたが、今回は歴史研究の手法を児童に確認させることも意図した。実は、この学年は、4年生の時も担当しており、その際は地域開発学習单元「弘前のお城と城下をつくった殿様」と題して取り組んでいる。その際も、現状からうかがえる根拠(状況証拠)を示しながら、予想・仮説に対する検証をいくつか行った(一例として、「なぜ、弘前のお城と城下は、今の場所にあるのだろうか」という、城地の選地理由を考えるものがある)。

今回の学習感想の中には、多くはないが、2年前の学習から導かれたと考えられる記述があった。その時

の手法を今回思い出してくれたようだ。今後の学びや生活に生かしてくれることを願っている。

(2) 中学校での学習との関連

学習感想の中で、すでに国策による増産に関してふれた児童もあったが、中学校では、昭和13年（1938）年に制定された「国家総動員法」の制定に関わる事象を学習する（教科書にはないが、陸軍省の「重要産業五カ年計画」（1937年）、「重要鉱物増産法」（1938年）も、鉱山の生産体制に関係している）。

4年生での地域開発学習では、「明確な答えのない問題」を、根拠を探しながら考えたが、その時の結論とは違って、戦時中の鉱山の増産・減産理由は、国策であることがはっきりしている。

中学校で国家総動員関係について学習する際には、小学校での歴史に関する学習を思い出し、明確な答えのある問題として全国的な動きの中で捉え直し、「確実な証拠」を見つけてくれることを期待している。

(3) 学習材としての鉱山の有用性

学習材としての鉱山については、その特殊性ゆえに様々な扱いができる有用性が挙げられる。前近代においては一種のアジールとしての側面があり（一説には無宿者や隠れキリシタンが多かったと言われている）、近代においては国策としての産業発展と森林破壊や鉱毒拡散などの公害、戦時中は労働力不足からの朝鮮人や中国人の強制労働問題などが含まれている。

また、過酷な労働ゆえの関係性の強いコミュニティと、その一方で階層性が存在するのも鉱山社会ならではのだろう。

さらに、鉱脈が見つかり開発が始まるやいなや、人里離れた山間の地に「不夜城」と市街地が突如として現れ、閉山となれば忽ち「狐狸のすみか」となる。その不思議な展開も鉱山地域の特徴とおもしろさである。

児童には、鉱山の学習材の魅力の一端を感じ取らせることができたかと思うが、今後さらに精進を重ねて、「おもしろい授業づくり」に励んでいきたい。

ところで、この舟打鉱山の実践ができたのは、今回使用した「舟打鉱山の興亡」の存在（旧相馬村の三浦稔教育長が編纂を主導）、そして、遺構の「秘境性」と児童の「日常性」との適度な距離感がある鉱山跡、この二つの魅力的なファクターが揃ったからであった。以前から教材化しようという思いをもちつつ無為に過ごしてきたが、今回の実践をきっかけとして、一歩を踏み出したことは幸いなことである。

(4) 教材化について

地域の素材を掘り起こし教材化するという活動は、中々骨の折れることである。だが、それだけにやりがいがあり、愉快なことでもある。その上で、子どもたちが楽しさを感じながら生き生きと学んでくれたなら、何も言うことはない。そうなれば、地域教材開発は教師自身の生涯学習とも重なり、まさに子どもたちとの「共有」となる。

ただし、実践に際して「教師の思い」が強すぎることは、利のあることばかりではないので、ここは自らにも注意をしておきたい。

〈参考文献・資料〉

- ・鳴海恒男「相馬村史」津軽書房 1985年
- ・「日本曹達70年史」日本曹達株式会社 1992年
- ・「舟打鉱山の興亡」相馬村教育委員会 1994年
- ・園部利彦「日本の鉱山を巡る〈人と近代化遺産〉上」弦書房 2015年
- ・園部利彦「日本の鉱山を巡る〈人と近代化遺産〉下」弦書房 2016年
- ・中澤秀雄・嶋崎尚子「炭鉱と日本の奇跡 石炭の多面性を掘り直す」2018 青弓社
- ・嶋崎尚子・新藤慶・木村至聖・笠原良太・畑山直子「〈つながりの戦後史〉別炭鉱閉山とその後のドキュメント」青弓社 2020年
- ・中島信久「我が国の亜鉛鉱山・精錬所の変遷と海外亜鉛資源確保の取り組み」（「金属資源レポート」2006.7）
https://mric.jogmec.go.jp/wp-content/old_uploads/reports/resources-report/2006-07/MRv36n2-14.pdf
（閲覧日 2021/6/15）